

資料紹介

大西家蔵番外謡本 (二)

西畑実

小倉御幸

次第へ千代の古道たとりゆく、く、月のにし山尋ん
 ハ当今に仕へ奉る右大将秋忠とハ我事なり、扱も藤原の定家の卿
 は、和哥の道に其名を得給ひ、世にはまれ高し、爰に式子内親王ハ、
 賀茂の斎イツキにそなハリ給ひしが、定家の卿サガ恐ひくくの御契り浅から
 ず、され共世の憚ハマカリを思し召けるか、片刃へ忍び給ひしを、内親王い
 となき給ひ御なやミと成給ひしが、程なくむなしくならせ給ひ候、
 此事を定家卿聞せ給ひ、世の成行キタ浅ましと思ひつゝけて、是も
 つるに空しくなり給ひて候、去間定家なく成給ひし事、君も哀と思
 し召れ定家の籠サダりし、西山に御幸有べきとの宣旨也、先立て住し所
 見て参れとの宣旨を蒙り、唯今小倉山へと急候 道行へ四つの海
 浜の真砂ハつくるとも、く、よむ言の葉はよもつきじ、御代の鏡

の池の水、にごらぬ世にやすまふ草ス、しげれる花の一ヒトえなる、かた
 びらの辻打過て、西山本に着にけり く、 詞「急候程に、小倉
 山に着きて候、いつくか定家卿の舎り所やらん、暫休らひ尋ハやと
 存候 上シテサシへあしたに花のかたちありといへ共、夕へにハ嵐
 とともにちりうせぬ、有為の有様無常のまこと、誰か生死の理りを
 ろんせざる、あら定なや候、山里ハ物のさひしまさりけり、人め
 も草もかれく、に、世の哥人の名のほまれ、たくひなかりしミねの
 月かわらぬかけは残れ共、いつしか今ハ雲がくれ、思ひ出るも、浅
 ましや 下哥へ詠むれハ衣手涼し久方の天のかハらの、秋の初風
 上哥へたちわかれいなばの山の峯におほる、く、松としきか
 は帰りこんと、つらね給ひし言の葉の残るハ名のミ浅ましや、つれ
 なきながらながらへて御跡とふぞ、恨しき く、 詞「いつもの
 ごとくけふも御墓へ参候へし、や、是に御渡り候ハ、まさしき雲の

うへ人と見へさせ給ふが、何とて此所には御入候ぞ。 ワキ詞「さきに尋んと思ふ処に、汝ハ此あたりの者ならハ、定家卿の舎のいでいハいつくにて有ぞおしへ候へ」 シテ「されバこそ不思議の事をとハせ給ふ、いか成人にてましますぞ」 ワキ「是ハ当今に仕へ申、右大将秋忠也、汝ハ如何成者ぞ」 シテ「扱かゝる草深き所迄は、何とて渡らせ給ひけるぞ、恥かしながらみつからこそ、内親王の召つかいの梅壺の侍従がなれるはてにて候、」 下「かく浅ましき此身なれば、恨みとは更に思ハすさふらふ」 詞「定家の卿のすませ給ひし所ハ、此山上にて候、わらハ御供申候へし」 ワキ「さらバおしへて給り候へ」 シテ「これこそ定家の御ノ庵ノ室にて候へ、又此方なるでは、式子内親王入御の時、御休らひの御跡なり、下へ我宿ハ小倉の山のちかければ、浮世をしかと、なかね日ぞなき ワキカ、ルへ実やふりにし跡を見れば、露むすぶ池の浮草茂りあひて、虫のね迄も心有がほなり、荒物さひしのけしきやな、
詞「いかに梅壺、ただ家の卿のつらね給ひし言の葉有べし、いと見まくほしうこそ候へ」 シテ「只今おしへ申しし、でいの四壁に詠哥有、上カ、ルへ是百人のあつめ哥なり、御覽候へこなたへと
上同へ妻戸をきり、と押ひらき、見れハむかしの人の面影や、みすのおひ風匂ひくる、花の都の外迄も、叡慮かしこき御恵み、只和哥の徳とかや」 ク同へそれ哥の事ハ神代よりはしむといへとも、文字の数もさためなし、今人の代となりて、めてたかりし詠哥を、集め給ふ」 サシへ始ハ天智天皇の御制なり 上同へ秋の田のかりほの庵の笹をあらみ、我衣手ハ露にぬれつつ 下シテへ第

二にハ持統天皇、 下同へ春過て夏来にけらし白妙の、衣ほすてふ、あまのかく山 クセへ柿の本の人丸、山の辺の赤人、猿丸太夫あし曳の、山鳥の尾のしだりおの、ながし夜を、ひとりかもねん恨有、喜撰が哥に我が庵ハ、都のたつミしかぞすむ世を宇治山と人やいふ、小野の小町ハ花の色ハ、移りにけりとつらねしも、わか身を見てし詠哥かや、和泉式部小式部紫式部と申ハ、彼石山の観世音、かりに此世にあらハれて、かゝる詠哥ぞ有難き 上へ在原の業平ハ、 同へ千早振神代もきかす龍田川、からくれなるに、水くぐるとはとつらねしも 本地寂光の都を出、本覚真如の身をわけ陰陽の神といわれしも、此業平の事ぞかし、貴からぬも高位に、座をつらぬるハ哥の徳、百敷や、ふるき軒端のしのぶにも、猶あまり有、昔なりけり、其外のうた人のいつれかおとりまさらん シテ詞「とても山ちのおついでに、しはらく待せ給ふへし、
上カ、ルへ四季の一字を集め給ふ、御物語申へし」 ワキカ、ルへ聞及ひにし一字の題、語給へや立帰り、委奏し申へし シテへ侍従仰を承、頓て次第を語りけり クリ上へ抑此一字の題と申事、如何成人の何事によつて、書集めたまふ故いかに共いさしらす
下へされバ四季の草木鳥けたもの、名を集め、是を詠哥の種として、詞の花の色々に、すゑの世迄のためしとかや クセ同へ抑定家の一字の題に春ハ先霞鶯梅柳蔭桜桃梨雉や鶉蛙なく葦山ふきつし藤夏にもなれハ莢草鶉さみたれくいなの鳥に卯の花螢や蟬に扇蓮泉や秋ハ又 荻萩露に薄蘭鴈鹿虫に露の月鶉や鳴に菊蔦楓や冬ハ又しくれの霜のうすこほり霰雲に雪鴨鷹ふすま椎とかられたり

上ロシキワキハ実面白き物語、いそぎ歸りて此由を委そうし申へし
 シテ上へ小倉山、峯のみち葉心あらハ、今一たびの御幸またん、
 是をぞ頼むころかな　ワキハ中々にミゆきハ頓て程あらし、御
 事とぞろきて　シテハ供奉の人々あまたにて、下向へ都のさがな
 れや、いと申てさらばとはや二尊院を出給へば、侍従ハ御跡見
 おくりてもとのいほりに、歸りけり　く

先　　帝

二人次第へさきだつ波の哀世に、く、なき跡いさや尋ん　ワキ詞
 「是ハ都の者にて候、扱も平家の一門ハ、長門の国にて悉果給ひ
 て候、又是に御座候御方ハ、能登殿の御乳母、三位の局にて御入候
 か、此度西国に御下有、一門の御跡を御吊ひ有度よし仰候間、我等
 御供申、唯今長門国へと急候　サシへさなきだに悲しかるへき焔
 風の、殊に身にしむ旅衣　二人へ浦浪迄も立さハき、しば鳴千鳥
 の友とてハ、浪に往來のあまの子の、声もさひし夕間暮、物思ハ
 ず共うかるへき、鄙の長路の、習ひかな　下哥へよしくうきを
 たよりにてなき跡いさや吊はん　上哥へ哀実昔ならばと夕波に、
 く、群ゐるかもめ立さハき、鳴音を聞もなつかしや事とハばやの
 都鳥、我思ふ世の人ならハ、さそ面影も残らめと、夢をも忍ひ　幻
 を松の影こそ淋しけれ、く　ワキ詞「是ハ早長門の国はやともの
 浦に御着にて候、暫是に御待候へ、里人に尋申候へし　シテ詞「な
 ふへあれ成旅人ハ何事を御尋候そ　ワキ「是ハ都の者にて候か、
 始て此浦に下りて候、平家の人々の果給ひて候所ハいつくの程にて

候そ　シテ「実々此落は平家の一門果給ひたる所也、先あれに釣
 舟の見えて候所こそ、先帝の沈ミ給ひし処にて候へ　ワキ「扱ハ
 あ釣舟の有所にて、君ハ沈ミ給ひけるそや、下へ荒御痛しや候
 シテ「又それより東にあたつて、鳴のむれいる浪の上こそ、只今吊
 ひ給ふ能登殿の沈ミ給ひし所候よ　ワキハ不思議の事を仰候もの
 かな、こなたより名のらぬ先に、誰と思ひて今吊ふ能登殿とハ仰候
 そ　シテ「何をかつミ給ふらん、あれに御入候ハ能登殿の御乳
 母、三位の局にてましますや、下へ有難やいとをしや、遠き
 境を遙々、分越し浦の波小船の、跡とひ給ふ心さし、申も中々
 愚なり　上同へあまのみるめにあらハれて、く、手向を請る幽
 霊の、魂魄に通ひきて御吊ひを悦ひの、法の力か教経の、常なき道
 に帰るとて、陸へハゆかて浦浪の、行ゑも見えず成にけり、く
 シカく　ワキハ夕塩時のむら千鳥、く、友寝すくなき磯枕波
 ハ鼓の夜もすから、夢の契りを待ふよ、く　後シテ一セイハ世の
 うき波のよるの月、沈ミし跡にや、かへらん　二句ハ波はやと
 ものうらみある、身は苦しみの、海深し　女カ、ルハふしきやなさ
 してまとろむ共思ハさるに、先帝の御姿、同じく能登守教経の、あ
 らたに見えさせ給ふそや、よし夢成共現成共、失させ給ふ御姿を、
 二度見るこそ嬉しけれ、荒不思議の事や候　シテ詞「うたてやな
 何迎夢とハ思ふらん、現とするたに世中の、程ハ渚の波杖の、唯
 みるめこそ現なれ、上カ、ルハ夢とな思ひ給ひそよ　女ハ実々今の
 仰のことく、現と見しも夢なれハ、今には限らし旅枕　シテハか
 たふく月の夜もすから　女ハ夢なりとても　シテハ幻成共

女へやすくハさめじ 秋のよの 上同へ長門の浦ハたのもしや、
 く、名こそ八重の塩路なれと、君すめば、爰も雲井の空をかし、
 され共なとやらん、都の方を恋しき、十善万乗の春の花、飛花落葉
 のことハりに、秋の葉の上実めの前の、浮世哉、く、
 上女カ、ルへ間に涙もます鏡、むかひてたにも猶ぬる、袖いつ迄
 の、浮世そや 下シテへよし、それも力なし、是も前世の宿因
 にて、辱くも一天の君だに、蒼海の波に沈み給へハ、我等が身に
 ハ数ならず、よし人々に思ひ合せて、さのミ歎き給ひそとよ
 クセいでく此たひ、うたれし人の事共を、一々に語りつ、切
 ハ外にも増れる歎ありけるよ、ひとり毎にはなかりけりと、思ひを
 忘る、程軍物語申さん 上シテへ平治の昔より、同へ寿永の今に
 至る迄、平家四海に威をふるひ、あらそふものもなかりしに、伊豆
 国の頼朝、身ハ流罪所ルザイゴにありながら、ふしたる龍のこづくに東南に
 雲をおこし其、いきほひ今ハはや西北の浪におほへり 上地へ去
 程に合戦半と見へし所に、思ひの外の波にたぐえて、沖より時をと
 つとつくる 是ハ阿波の民部か心かハリなれハ沖も陸も敵にて今迷
 るへきやうなかりしかハ教経心に思ふ様天晴源氏の大将義経にあハ
 くやと思ひ雑兵の船に入て見れハまさしく義経か舟と見しよりも
 打物頓て取直し、能登守と名乗かけてあたりを払て切て入ハ嵐に
 村雲のはる、かこづく数万の軍兵はつとのいて紛れもなく義経教経
 大将二人きつききを打ちかへてしハ勝負も見えさりけり譬ハ龍
 虎の威を振ひ獅子象のいきほひや帝釈修羅の日月をも手にとる計の
 能登守あら物々しや義経かとて打物ふりあげ甲に当て丁とてハは

つたと合せこめハそむけて払ふほくしんふくしんの力をあはせて弥
 手こかく成しかハいさや組むと云儘に打物捨てて懸れハしさつて
 払ふさそくに遙なる味方の舟につんと飛のれははやわさおとりの悲
 しさはつ、ひてもとはされハこそせん方なくて其儘船にのりつねハ
 腹立しかつておめきさけんて座し給ふ去程に安芸の太郎兄弟ハ落あ
 ひて能登守とむすと組は汝ハ敵にたらね共最期の御供申せやとて
 あきの太郎同次郎二人を左右の脇にははさんて波の底に入給ふ新中納
 言知盛ハく此有様を御覽してめのとこの家長か弓とを取かハ
 しつれて海にそ入給ふ 二位殿是を御覽して今はいかうよと思し召鈍
 色のふたつ衣にねり袴のそハを取神璽を脇にはさみ宝剣を脇にさし
 我身ハ女人成とも敵の手には渡るまし主上の御供申さんとて安德天
 皇の御手をたまハリ船はたに臨給へハ何くへそと問給ふ此国と申ハ
 かく浅ましき所なり極楽と申て目出たき所かあの浪の下に候御幸
 なし申さんと泣き奏し給へハ切ハ心得たりとて東に向はせ給ひて伊
 勢天照太神に御暇申給ひて又十念の御為に西にむかハせ給へハ 夕
 日光か、やきて龍顔誠有難き眉のあたりの打けふり未央の柳の幼な
 き御手を合せ御十念高らかにあそハし 今そしるみもすそ川の流に
 は波のそこにも都ありとはと是を最後の御製にて千尋の底に入給へ
 はかたきも味方も一度にわつとかなしひの声かときけハ波風の音に
 て夢やさめぬらん音にて夢や覚ぬらん

久 米

次第へ教唄しき法の風、く、心の空に晴ぬらん

シテ詞「是ハ和

州上^ミの郡、久米の普次郎^{スガ}と申者にて候、扱も我常に医王善逝^{セイ}を信し、毎日薬王三願^{ヨクコタ}経意^{ヨクコタ}る事なし、其仏力の功德にや、不思議に仙郷に入り安曇^{アトシ}仙人を師範^シとし、仙術^{シユツ}を鍊し、今ハ其名を改め、久米の仙人と成て候、仙術の力にて飛行^{ホウキョウ}翻^ホ變の身となり、虚空をかける事心の儘なれハ、けふも四方を順^ホ見し、慰^ホまはやくと存候 道行
 へ身の儘とはや浮雲に法の道、く、無窮自在に飛走^{ヒョウソウ}して爰に道ゆく芦原の、我古里や足曳の、大和国ハ、是なれや く 詞「是ハ吉野のあたり勝手^テの里にて候、暫休らひ四方を詠めハやと存候
 一セイ女へ麻衣、ほす隙もなき明暮を、渡り兼たる、浮世かな
 サシへハ三吉野勝手^テの里の女にて候、実や貧家^{ヒンカ}に生れてハ、すむ甲斐もなき浮身^{ウキミ}ながら、けふも又河辺に出て布すまし、浮を心のよすかにて木曾の麻衣洗^{アラ}ハん シテ詞「荒不思議^{アラ}あの河辺を見れハさもヤことなき女はぎ高くか、げ、布洗^{アラ}ふ気色見へたり、下へなまめく姿におもほえず、さばかり神^{カミ}通妙力の仙も、はや色にそむ花心、 詞「いかにあれ成女性に申へき事の候 女へ不思議^{オモシロシ}やな峨^カたる山の常^{トコ}陰より、其様けしたる^{サマ}はせにて、我に詞を掛給ふハ、いか成人にて有やらん シテ「我ハ是人間苦界を離れ、髣髴^{コウキョク}清淨の身なれ共、自變化^{ジクバク}の像^{カガミ}を愛し姿を見するはかりなり 女上へ山彦の呼^ヨ木魅^キの二度も、鬼の形ちか冷しヤと、そごるに胸打^{ムネ}さくそや シテ詞「恐れ給ふな我姿、思ひ入さの山あれて、上へ風にたよひおのつから、乱る、色ハ恥かしや 女へこハそも夢か現なや、余所の人目もいかならん シテ詞「逆も早穂に出ぞめし言の葉を、受給ハぬハ情なし 女へ女ハいらへ

もあらされハ シテへ恨を添て 女へゆふ四手の 同上へ手引の糸かよる方も、く、絶ぬ思ひにむすほふれ、煩惱^{ボンノウ}のほむら身を焦^{コガ}す、よしや只思ハしと、現にたとる心ちして、岨^ケしき山の常陰^{トコカゲ}より、覚へす墮落^{ダラク}したりしハ浅増かりし、気色かな く 詞「夫六道四生の衆生ハ貧愛^{ヒンアイ}を苦因とし、業障^{ゴウシャウ}の雲晴かたし サシへ然るに色欲^{シヨク}の迷ひ、我身ひとりに限らず、 同へ波羅奈国の一角仙人も、旋陀夫人に心を移し、扱又日月燈明^{ハカイ}仏も、八人の王子に謂有 シテ下へ掛る妙覺^{ミョウカク}極果^{キョクカ}の仏も、 同へ一度ハ破戒^{ハカイ}の名を得給へり ケセ下へ実や恋^{コイ}慕^{ホシ}の愛^{アイ}執^{シツ}ハ、是三界^{キゾナ}の紐^{ヅナ}なり、其上掛^{ウヘ}己色欲^{ココロ}の、迷ひハ身ひとりに限らずと、毘婆娑論^{ヒバサロ}にも、優陀遠^{ウエダエン}の王宮あまたの官女ひきめて波陀山^{ハタ}に遊ひ給ひしに 上へ五百の仙人ハ、同へ虚空^{クウコウ}をかけり給ひしか、多くの官女の声を聞きて愛念^{アイネン}を発しつゝ、神足を失ひ山林に落し其例^{タトシ}、今身の上と、浅増かりし次第か 同へシテ詞「さのミハ何と包へき、我ハ久米の仙人成か、思ハす妙成御姿に、通力^{ツリキ}をうしなひて候 女へ仰を聞^{コト}いたハしや、此上ハ童か住家へ伴ひ申候ハん シテ「荒嬉^{アラキ}しやさらハ御供申候へし 女上へいさこなたへと諸共に シテへ伴ひ行と 女へ思ひしか 上同へ有し女ハ忽に、く、波のうたかた消失て、物冷しき山陰に薬王菩薩^{アフラク}新に、光明赫奕^{カクヤク}たる気色なり、其時仙人ハ、夢のさめたる心ちして、有難や御本尊の、煩惱^{ボンノウ}をきしめんと、女と現しおハしまし、誓ハせ給ふ利益そと歡喜の涙せきあへす 下キリへ扱それよりも仙人ハ、く、彼御本尊を渴仰し、東塔院に安置^{ヂヤ}して、

ケセ本よりの身ハまほろしのかりの世に語り出るも時の間の契り
 の末ハ枯増る忍の軒もあれ行は朝には鸞鏡のかけを惜ミ遠山の眉墨
 も匂ひを忘れ夕へハおしの方すまのひとへなる河崎の影うときひ
 とりの床を物うきよしや何事も常に住へき世の中の道をと恨みに
 かくに 上へ絶ぬ思ひをいへはえに岩ねによりて終に身ハ底のミ
 くつと成果て其ま、通ふ三瀬川かへらぬ道を敷しに思ひの外なる吊
 ひに逢夜の鳥は物かハと云しに増る言の葉を残して頼む彼岸に至る
 へき道芝の露をや結びをきけん シテ下へ思ひそ出ツる今宵の秋、
 三五の月の隈なきに、大将の君取あへす、古き都をきてミレハ
 上同へあさちか原とそ、あれにける マイ シテ上へ月の光ハくま
 なくて 上同へ秋風のミそ、身にハしむ 上同へさる程にく夜
 もしらくと、明方になれば、暇申て更ハとて、大将都にかへり給
 へハ宮も名残の涙の御わかれ、我はよしなき其ことのはを、長きわ
 かれの形見にて、猶苦しみを、三瀬川に沈ミ果しをいま逢がたき、
 御法に引れ、今あひかたき御のりに引れて、仏果を得るこそ、有か
 たけれ

人 丸

次第へ九重出る旅の空、く、八重の塩路に急かん ワキ詞「是ハ
 江劬阿弥寺の住侶登蓮法師にて候、我此程ハ都に候ひて、靈仏靈社
 残なく拜ミ廻りて候、又西国をミす候程に、此春思立西国行脚と志
 し候 道行へ都を八霞とともに立出て、く、鳥羽の恋塚秋の山
 淀山崎を打過て、何国のゐなの小笹原、一夜仮寝の草枕明石の浦に

着にけり、く 詞「急候程に、是ハ早番磨の国明石の浦に着て
 候、暫人を相待、名所をも尋ハやと存候 シテ一セイへ明石瀉、月
 待方に行船の、浪静成、浦伝ひ サシへ是ハ此明石の浦に住馴
 て、心しらても立交る、和哥の浦半の人並に、よるとや云ん笹蟹
 の、蜘蛛の振舞頼む陰も、遠嶋守の独居に、馴て汀の蟹のわき、みる
 計にや、過すらん 下哥へ芦田靄の声を友寝の仮衣夜寒を何と明
 さん 上哥へ月にさへ隔られゆく春の夜の、く、恨ミハ中の衣
 そと、霞に向へハ大空の契になして明暮す、心の妻の折も尽せぬ
 浦の、詠めかな く ワキ詞「いかに老人に尋へき事の候
 シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ ワキ「是ハ此所初て一見の
 者にて候、浦々致景を詠め入、目を驚かして候よ シテ「実々我
 等ハ此所の者にて候か、浦に出てハ帰るさを忘れ候に、増てや初て
 の御方ならハ嘸有らん、何国迄も御たつね候へ教へ申候へし
 ワキ「先東に見えて候ハいか成所にて候ぞ シテ「さん候あれ社兵
 庫和田の御崎、末に繞て見えたるハ、下へ天の川是や流れの末な
 らん、 詞「空より落る布引の滝の流れは生田川、詠絶せぬ名所也
 ワキ「猶も此方に見えたるハ シテ「衷も愚かや拾遺集に、
 下へ白波はたてど衣に重ならず、 詞「明石も須磨もおのか浦とと、
 上へ彼人丸も詠め給ふ、須磨の浦にて候 ワキ詞「扱又西に見
 えたるハ シテ詞「名も高砂の尾上の松近きあたりハ室の泊
 ワキ上ガハルへ海上遙かに詠れハ、雲に統き嶋のミゆる、あれハ名に
 あふ嶋やらん シテ詞「忝も神代の昔、伊弉諾伊弉冊の尊のあま
 の戸鉾を指おろし給ふ、其したりのこりかたまり、日本最初の淡

路嶋、おろころ嶋共申也 ワキ上 猶も南に見えたるハ シテ
 和哥の浦風吹上や 上同 紀の路の小嶋見え渡る、く、其方
 も色濃藤代の松の葉茂き詠めかな 上ロソギ地 へまだ名残ある有明
 の、く、霞む其方の沖遠く続ける浦ハ何国ぞ シテ上 へあれ社
 由良の戸を、渡る舟人梶をたへ、行衛もしらすと詠ける名におふ花
 の名所也 上同 へ忍ふ恋路の便りにも、見えて末有ゆらの戸のあ
 たりハ妹が嶋やらん シテ下 へ嶋ハそれ、く、いもハ誰共しら
 ぬ江の、形見の浦も名計に 上同 へ馴て通ハ、同じ江の、和哥の
 浦人隔なき友と思召、実ヤ世中ハ、胡蝶の夢の戯れに、唄へや舞や
 津の国の、難波の事も法の人他生の縁は、有難や く ワキ詞
 「近比面白き人に参り逢て候、又此所に人丸の御旧跡の御座候由承
 候、何国の程にて候ぞ御教候へ シテ「さらハ此方へ御出候へ、
 是社人丸の御旧跡、明石の明神と崇め申候、能く御拜候へ
 ワキ上 へ扱ハ昔の人丸の、神と現して此所に、地をしめ給ふ有難き
 よと、感涙肝に銘するぞや、 詞「猶も人丸の御事御物語候へ
 シテ「さらハ委く語つて聞せ申候へし クリ上 へ夫人丸と申ハ、
 父もなく母もなく天降ります、化人なり サシ へ人王四十一代の
 帝、持統天皇の御宇かとよ、 同 へ石見の国朝田の郡、山田と云所
 に民屋あり、此家の辺りに柿の木有、此木の本に其齡廿余り成
 人の忽然とイミ居たり クセ へ主此人を軽シみて、御身ハ何国よ
 り、来り給へる人と委く尋申せハ、我ハ来れる方もなし、行へき方
 も、しらすと宣へハ、是ハふしきの御事や、いか成所存御座ます、
 又何事を、家業とハし給ふそと、重て尋申せハ、我ハ道広き、哥を

好めと宣へハ、賤敷民の墓なきハ、哥と云をしらすして、頓て国師
 に申せハ、国司此申聞召、彼人を請しつ、其人ハ見給ひて、歌
 を聞んと有しかハ、寔にたやすく目出度、哥を誦給ひける、国師不
 思議に思召、伴ひ都に上りつ、大君にかくと奏聞す シテ上 へ帝
 叔覽ましまして、哥道の事を、御尋有しかハ、何に答の聞からず、
 君も叔感座しまして、代々に仕へ給へり、されハ人丸ハ柿木より、
 出現ましますハ、姓をハ則柿の本とハ付たまふ、哥の道長して、極
 りなかりし其故に、哥の聖とも此人丸を申なり 上ロソギ地 へ不思
 儀成とよ老人の、余り委き物語其名を名乗給へや シテ上 へ我名
 を何と石見瀨に、昔ハ住馴し人丸、今ハ明石の神成か夢中に現し来
 りたり 上同 へ扱ハ明石の明神を、目下拜む事肝に銘じて有難や
 へし暫待せ給へと 上同 へ夕山松の木陰に、立よらせ給ふか、社
 檀の、扉を押ひらき御殿に入せ給ひけり く ワキ上 哥 へ所から
 夜をも明石の旅寝して、く、有つる告を待んとて、袖を片敷臥に
 けり く 後シテ上 へほのくと、明石の浦の朝霧に、嶋隠れゆ
 く、舟おしそ思ふ 上同 へ御殿頻りに鳴動して、頭れ給ふそ、忝
 なき シテ上 へ我曠功の昔より、和哥を守りの神たりしか、衆生
 を濟度せん為に、仮に人間と現し、君を勇め和哥を進め、代々に仕
 へし身なれ共、今ハ此明石の浦に跡を垂、君をあがめ道を守る、明
 石の明神とは我事也、こゝに和哥の友稀成所に、登蓮法師我をと
 ふ、今宵の値遇に引れて、五衰の眠りを覚す、いてく和哥の奥儀

を頭ハし、終夜ヨモカクラ慰め申へし、夢はし覚し給ふなよ、ワキ上へ荒
 難の御事や、かゝる奇特に逢事も、只是和哥の徳なりと、感涙袖カナルイ
 潤ほせり、詞「猶と和哥の奥儀をも、委く語りおハしませ
 シテ詞「いてく語つて聞せ申さん 上へ夫哥ハ天地人の三才を以
 ヲて詠吟とす、三才といつは、天に五形有地に五色有、清濁和の三
 つを三才と云、魂ハ是和氣也、されハ此和が成性を哥と云、其徳更
 にはかり難し、天地を動かし鬼神スムを感じしめ、男シ女の心慰め、
 猛き武士モノノフヤを和らぐるも、是和哥の徳なり、荒有難や、御身敷鴨の道
 に心を掛ケ、和哥の値遇のミ深きにより、仮に姿を頭ハして、哥物
 語申也、逆見くえし折なれハ、いさや舞樂を奏しつゝ、夜すから慰
 め申さんと 上同へ御声の下よりも、く、音楽聞え光りさし、
 糸竹の役々秘曲を尽し、拍子を揃へて夜遊の舞樂ハ面白や ガツ
 上同へ夜遊の舞樂も時過て、く、月澄渡る春の夜の、浪のよせ敷
 手の舞足踏とうくと、拍子を揃へて舞給へハ、夜もしらくと、
 あかしのうらに、夜もしらくと明石の浦に、有つる夢ハ、さめに
 けり

驚乃前

次第へ治る御代の年久し、く、今此時そめてたき、ワキ詞「是ハ
 延喜の聖主に仕へ奉る官人にて候、扱も我君賢王にて渡せ給ふによ
 り、吹風枝をならさす民戸ざしをさす候、誠に目出度御代にて御
 座候間、今ニ日ハ神泉苑の池の辺りへ御幸成て、御遊覽あらふする
 との宣旨にて候間、其旨皆、心得候へ、此間へ入、王ニセイへ久方の

地へ叡慮に叶ふ有難や、く、
 大臣カ
 ワキ詞へ猶々目出度謂れ申上候
 へ、
 ワキカ
 シテト有
 同へせきれいのつばさをかたとりて、陰陽の道と成とかや
 下へ則国土おさまる事、唯此鳥の、おしへとかや、クセへ其後久
 堅の、天の宮よりかたしけなく、此秋津洲の中津国を、見そなハシ
 給ハんとて、天若彦をつかハすに、其まゝ三年迄御返り事申さざれ
 ハ、名なしの雉子を以て重て勅をなし給ふ、程なく御代をたいらけ
 恵みあまねき四方の空に、蟹の取り舟とびかけるつハさの羽風なひ
 き臥草ウ木クも心有とかや、上へ然れ共神の御代、同へ地神五代
 に至りてハ、うかやふきあハせずの尊の代に、荒ふる神達禍なす、
 ケイ、カ、ヤ
 強火の輝く神、乱れがハしく岩原の、代をまたおさめ給ひしも、
 御先と成て飛去りし、八咫の鳥の羽に懸る、玉垣の内の国や土も木
 も君の御影かな、上へ猶々君の御恵み、く、

五位驚ト宣命ヲ給テ後備中ノ国ニ飛行彼所ニテ死タリ
 其所ヲ驚ノ森ト云也